

MACF 礼拝説教要旨

2020/05/10

ローマの信徒への手紙 3章 1～9 節

「罪の下にある人間」

3:1 では、ユダヤ人の優れた点は何か。割礼の利益は何か。

3:2 それはあらゆる面からいろいろ指摘できます。まず、彼らは神の言葉をゆだねられたのです。

3:3 それはいったいどういうことか。

彼らの中に不誠実な者たちがいたにせよ、その不誠実のせいで、神の誠実が無にされるとでもいうのですか。

3:4 決してそうではない。人はすべて偽り者であるとしても、神は真実な方であるとすべきです。

「あなたは、言葉を述べる時、正しいとされ、裁きを受けるとき、勝利を得られる」と書いてあるとおりです。

3:5 しかし、わたしたちの不義が神の義を明らかにするとしたら、それに対して何と言うべきでしょう。人間の論法に従って言いますが、怒りを発する神は正しくないのですか。

3:6 決してそうではない。もしそうだとしたら、どうして神は世をお裁きになることができますでしょう。

3:7 またもし、わたしの偽りによって神の真実がいつそう明らかにされて、神の栄光となるのであれば、なぜ、わたしはなおも罪人として裁かれねばならないのでしょうか。

3:8 それに、もしそうであれば、「善が生じるために悪をしよう」とも言えるのではないのでしょうか。わたしたちがこう主張していると中傷する人々がいますが、こういう者たちが罰を受けるのは当然です。

3:9 では、どうなのか。わたしたちには優れた点があるのでしょうか。全くありません。既に指摘したように、ユダヤ人もギリシア人も皆、罪の下にあるのです。

パウロは前の章でかなり厳しくユダヤ人の偽善的な生き方を糾弾しました。

しかし、ユダヤの人たちは「神に選ばれた民」という意識を持っていますから、

パウロに対しては反発するわけですが、パウロはそれに答えます。

1) 神の言葉を託されている

パウロはユダヤ人の優れたところを列挙しようとしているのですが、実際は書きながら興奮のあまりその要点を一つしか上げていません。

それは「神の言葉を託されている」という事実です。

人生における指針として「神のことば」が与えられ、昔から尊ばれ、読み聞かされ、それを習って生きられることは幸せなことだと思います。

昔のものが全て良いわけではありませんが、時代を超えて伝えられ実行され、社会を維持する土台として尊ばれたものは意味深いものがあります。

神の言葉、である聖書、当時は旧約の部だけだったのですが、そこに語られている神と民の歩み、絆、祝福、呪い、それらが社会の土台となりました。

それは実に大きな意義があります。

にもかかわらず、それを守りきれない弱さ、それに従いきれない弱さを人間は持っていることにパウロは気づいています。

つまり、聖書は持っていれば価値があるわけではなく、それを学び、教えられ、実践してこそ意味があるというのです。

2) 人の不義と神の義

聖書を知っていることを誇り、自分の生活を省みることもせず、独善的に生きているユダヤ人たちにパウロは鋭く問いかけます。

「彼らの中に不誠実な者たちがいたにせよ、その不誠実のせいで、神の誠実が無にされるとでもいうのですか。」

「わたしたちの不義が神の義を明らかにするとし

たら、それに対して何と言うべきでしょう。」
つまり、「神の言葉を聞いても学んでも、私たちは相変わらず罪の中を好み、生活を変えることができないなら、神など不要ではないか」という意見と「我々人間が悪いことをすれば、するほど、神の正義がしっかり見えてくるのだとすれば、我々の罪が神を助けていることになるのではないか。神をもっと正しく見せるために我々をもっと罪を犯しても良いのではないか」という議論です。

3:7 またもし、わたしの偽りによって神の真実がいっそう明らかにされて、神の栄光となるのであれば、なぜ、わたしはなおも罪人として裁かれねばならないのでしょうか。

3:8 それに、もしそうであれば、「善が生じるために悪をしよう」とも言えるのではないのでしょうか。

悪を行うことが神を助けることになるのではないかというわけです。

パウロは断固として、それらの質問に「ノー」と答えています。

3) 神の言葉が託された大きな理由

3:9 では、どうなのか。わたしたちには優れた点があるのでしょうか。全くありません。既に指摘したように、ユダヤ人もギリシア人も皆、罪の下にあるのです。

実は、聖書が私たちに語っていることを最も短く要約すれば「我々は神から離れ、神の道からずれた生き方をしている」

そういう私たちに神は「立ち返りなさい」と告げているということになるでしょう。

ここでパウロは「罪」をととても深刻なこととして捉えていることがわかります。

それは「ユダヤ人もギリシア人も皆、罪の下にあるのです。」という言葉からもわかります。それはまた「人間には罪からの解放が必要だ」というこ

とでもあります。

聖書はこのことを私たちに気づかせようと神が私たちに与えくださったものです。

「罪の下」と言われてもなかなかピンとこないかもしれません。「心のうちの罪」「行為として実行した罪」「隠している罪」という場合、それは私たちの「内側に罪がある」と理解できます。

しかし、パウロは、我々人間はすべて「罪の下にある」と断言しているのです。

罪の下とは、すなわち、「罪の支配下」に置かれているということです。

つまり、罪の持っている力と影響力は私たちの限界を超えていて、私たちに実には不自由な状況に追いやり、まるで私たちの意思とは関係なく、知らず知らずのうちに神に逆らう道を選んでいるような状況になっていることに気づきます。

発想も存在もすべて「神の意図とは別のものを選ぶ傾向性」に取り囲まれて生きているようなものです。

私たちの罪を赦してくださいと祈る時意識するのは多くの場合、行為として実行した罪です。

しかし、「罪」は自分の内側に閉じ込めて置けるような弱い、小さいものではなく

「私たちの力を超えた悪の習慣性、悪についての無自覚、無感覚な状況に私たちに追い詰め、最後には希望を奪い去ります。まさに支配している力としての罪をパウロは訴えているのです。

それは別の言い方では「自らを神とし何でも判断できるという過信が、私たち自身を支配してしまっている」とも考えられるかもしれません。

自分自身を行動に走らせ判断の基準をもたらし、存在自体を左右する力、それは「自分勝手、自分本位の自我」が増大し膨張し、自分でコントロールできなくなっている人間の姿を表現しています。自分が神のように振る舞えないことを許せない心

がそこにはあります。

私たちは、努力をし、精進しても、私たちの存在そのものが「自分の力の限界を超えた罪の影響下」に置かれている以上、何もできない、翻弄されるばかりなのです。

私たちは罪を犯せば良心の呵責に悩み、直したい、やめなければと思います。

しかし、私の存在自体が「増大した罪の影響下にある」ので、解放は、私の外からもたらされなければ不可能なのです。

そこに人間の不幸の根源があるのだと思います。自由がそこなわれ、不自由な中で恐れや不安に取り巻かれ、まるで見えないウイルスにおびえるように、罪と闇の影響下に置かれて生きているのです。

不安になって、当たり前、恐れを感じ、不自由を感じて当たり前の状況なのです。

「ユダヤ人もギリシア人も皆、罪の下にある」のです。

だからこそ、イエス・キリストによる解放の必要性が見えてきます。

実は、コロサイの信徒への手紙の中にパウロは重要な文章を残しています。

彼はこう書きました。

1:13 御父は、わたしたちを闇の力から救い出して、その愛する御子の支配下に移してくださいました。

1:14 わたしたちは、この御子によって、贖い、すなわち罪の赦しを得ているのです。

罪の赦しというのは、罪の下からの解放であり、存在そのものが、キリストの支配の下に置かれることを意味します。

闇と罪の支配下から解放され、御子イエス様の支配の下に置かれるようになり、そのお方の支配権、統治権のもとで生きられるようになるのです。

罪からの解放は心の一新ばかりでなく、支配権の変化でもあるのです。In Adam から In Christ へ。

闇の世界からキリストの支配下に移行されるのです。

大きな変化です。

それをパウロは教えようとしています。

それをわたしたちひとりひとりが、体験的に知ることができればと心から思います。

どうぞ、祈ってください。

「イエス様、私の罪を赦してくださることを感謝します。そして、そればかりか

私をあなたの支配の下に置いてくださることを感謝します。主よ、信じます。

私を憐み、罪の赦しと闇の力からの解放をお与えください。それをしっかり

生活の中で知ることが出来ますように。イエス様の御名によって、アーメン」

パウロはいよいよ、本論に進んで行こうとしています。

罪の支配下からの解放についてさらに深く語られています。

祝福がありますように。

関根一夫